



担当=DZHフィナンシャルリサーチ・石原敬子

トムソン・ロイターのフィナンシャル・リスク部門の名称はRefinitiv(リフィニティブ)に変わりました

知りたい
投信 なるほど
リッパー

4月までの資金動向

「損失限定型」を選んだ結果は…

新型コロナウイルスの感染拡大防止で、緊急事態宣言が出された4月。経済への影響を心配する一方、投資信託市場には資金が集まりました。

リッパーの推計では、上場投資信託(ETF)以外の株式オープン投信で約1452億円の純流入となり、4カ月連続の純流入です。ETFを含めた純流入額は、4月単月で1.5兆円、1～4月の累計では4.6兆円でした。特に近年はETFへの資金流入が目立

ちます＝グラフ。

個別投信の表で、純流入額上位は常連銘柄。世界で株価が大きく下落した3月、米国株が急回復した4月を経て、1～4月はグローバル株や米国株の投信が買われました。

今回、純流出額上位に「損失限定型」が登場したので苦言を一言。あたかも安心感があるように思われますが、とても複雑な仕組みで、余分なコストもかかります。もちろん預貯金のような「元本保

証」とはまったく違います。

1位の「アムンディ・ダブルウォッチ」は基準価額が下がると安定運用に切り替える方針。運用会社のアムンディが「フロア水準」と呼ぶ、基準価額の下限の目安があります。相場下落で安定運用に切り替わり、設定以来最低の9546円45銭で4月30日に繰り上げ償還されました。

5位の「SMBC・アムンディ プロテクト&スイッチファンド」も類似のタイプ。こちらは3月に「プロテクト

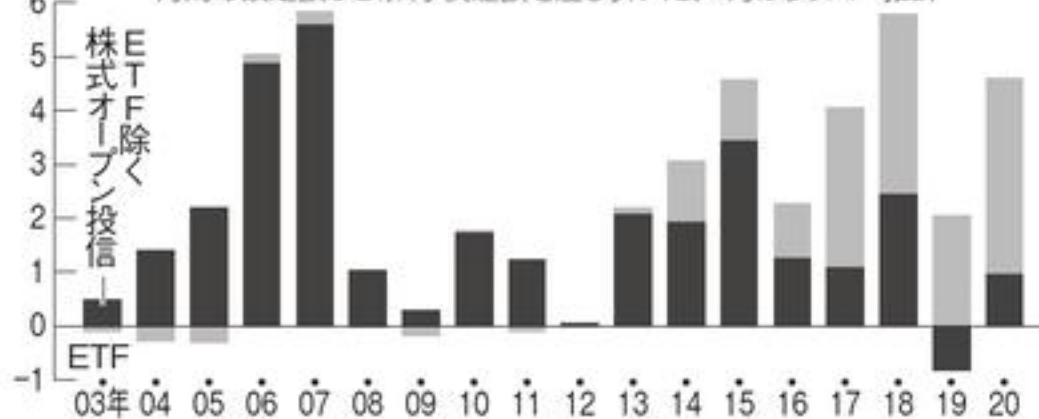
ライン」という運用の下限に接近して、現在、守りの体制で運用を継続中。今後、基準価額の下落は限られますが、株価が上昇しても値上がり益は期待できません。基準価額がプロテクトラインまで下がると、募集時の9割の価額で繰り上げ償還されます。

リスクを嫌う投資家と、投信を売りたい販売会社のはざままで、運用会社が巧妙な仕組みの投信を開発する。3者のいたちごっこが招いたのが、今回の結末です。

■資金純流出入額ランキング (2020年1～4月)

順位	ファンド名(☆は20年新設、※はラップ口座専用)	資金純流 入額(百万円)
〈純流入額トップ5〉		
1	ティール・ロウ・プライス 米国成長株式ファンド	138.354
2	ピクテグローバルインカム株式(毎月分配)	123.319
3	☆GSフューチャー・テクノロジー・リーダーズ Bコース(為替ヘッジなし)	115.184
4	次世代通信関連 世界株式戦略ファンド(三井住友トラスト)	101.750
5	グローバル3倍3分法ファンド(1年決算型)(日興)	74.017
〈純流出額トップ5〉		
1	アムンディ・ダブルウォッチ	-63.863
2	野村インド株投資	-53.714
3	※ファンド・マネジャー(海外株式)(三菱UFJ国際)	-51.960
4	※ファンド・マネジャー(国内株式)(三菱UFJ国際)	-43.638
5	SMBC・アムンディ プロテクト&スイッチファンド	-30.863

(兆円) **存在感が増すETFへの資金流入**(各年の1月～4月累計)
月間の設定額から解約・償還額を差し引いた。4月はリッパー推計



上場投資信託(ETF)を除く株式オープン投信について設定額から解約・償還額を差し引いた。リッパー推計